

主 題：キリスト者の姿 : パウロの勧めによる
聖書箇所：ローマ人への手紙 12章9-18節

2012年はあと36時間30分で終わり、2013年を迎えます。2012年、日本においても世界においても様々なことが起こりました。夏にはロンドンオリンピックがありました。特に、日本の女性アスリートたちが非常な頑張りを見せて、日本最高のメダル数獲得になりました。私は普段、バドミントンをやっていますので、女子ダブルスが史上初めてメダルを取ったということで、バドミントンもマイナーなスポーツから少しは皆さんが知ってくれるスポーツになるかなと期待しています。また、山中教授がノーベル賞を取りました。これもすばらしいことです。恐らく、近い将来には今まで治せなかったいろいろな病が治せる時代が来るでしょう。また、先日、日本でも政権交代がありました。民主党から自民党へと政権が変わりました。中国でも最高指導者が変わりました。お隣の韓国では初めて女性大統領が生まれました。アメリカはオバマさんが引き続いて大統領の職をすることになりましたが、アメリカでも大きな選挙があったのです。世界中で様々なことが起こったこの一年だったと思います。

私たちの教会、私たちの群れのことを考えても大きなことがありました。6月末に岡田先生が退任されました。また、約30年間、私たちは泉佐野の地で伝道活動を行なって来ましたが、その働きの一つの区切りとなった年でもあります。

しかし、皆さん、私たちの伝道が終わったわけではありません。私たちは週報の上段に書かれている「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。」というみことばに沿って私たちクリスチャンは今も生かされているのです。そのことを覚えながら今日ごいっしょにみことばを見ていきたいと思います。

今日はローマ人への手紙12章9-18節を通して、私たちキリスト者の姿についてパウロはどのように私たちに勧めているのかを見ていきましょう。

1. 総論

12章の冒頭は「そういうわけですから、」ということばで始まっています。ですから、この前に語られたことをもって12章から続いて語られているということは皆さんよくご存じでしょう。

1章-11章 : 教理的部分

12章- : 実践的部分

12:1「そういうわけですから、」と「そういうことを踏まえて」ということで、パウロは実践的なことを教えるのです。実際の生活においてクリスチャンはどのように歩まなければならないのか、どのように生活しなければいけないのか、パウロはこの12章から教えていくのです。

今日、ともに学ぶ9節の前を見ると、

12:1-2:「キリスト者たちに真実の献身を勧める」

それは12:1でこのように書かれているからです。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」と、このようにパウロは勧めています。

12:3-8:「キリスト者たちがともに仕え、ともに成長していくことを勧める」

ひとり一人が与えられた賜物を十二分に用いるようにとパウロは言うのです。それは12:3にこのように書かれているからです。「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」、5節「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのか

らだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」とこのようにパウロは教えます。

2. 12:9-18 愛を土台とするキリスト者の姿

そして、今日学ぶ9-18節、パウロはここで「愛を土台とした私たちクリスチャンの姿」を説いています。

◎土台となる「愛」について

a. その愛はキリストにある愛

ヨハネはIヨハネ4:16でこのように言っています。「私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。」、私たちクリスチャンが土台とすべきものは「キリストにある愛」です。

b. 愛の伴わない行為はすべてが無意味である

愛の伴わない私たちの行為はすべて無意味なもの、無価値なものであるとみことばは教えています。皆さんよくご存じのコリント人への手紙第一13章では、そのことをはっきりと私たちに示しています。特に、13章2節と3節の後半にはこのように書かれています。「…愛がないなら、何の値うちもありません。…愛がなければ、何の役にも立ちません。」と。

私たちはこのような愛を土台として、信仰生活においてクリスチャンとしてどのようであるべきかを goいっしょに考えていきたいと思えます。

☆「11」の具体的勧め

パウロはこの12:9-18の中で11個の具体的な勧めを私たちに教えています。この箇所を読みましょう。

12:9 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善に親しみなさい。

12:10 兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。

12:11 勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。

12:12 望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。

12:13 聖徒の入用に協力し、旅人をもてなしなさい。

12:14 あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません。

12:15 喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。

12:16 互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思てはいけません。

12:17 だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。

12:18 あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。

1) 12:9 a 真実の愛を身に着ける

9 a 節「愛には偽りがあってはなりません。」、先ず一つ目は、私たちキリスト者は真実の愛を身につけなければいけないということです。ここに「偽り」と書かれています。それは「振りをする、本物でない」ということです。演技であったり芝居であったり、そのような状態を表わしています。私たちクリスチャンの愛は、見せかけの愛、あるいは、心の伴わない愛であってはいけないと言うのです。私たちが身に着けるべき愛は、真実で純粋なものでなければなりません。皆さんよくご存じのガラテヤ5:22に記されている「御霊の実」の最初は「愛」です。愛が御霊の実の最初に来ているのです。私たちはその後様々な御霊の実を見ますが、初めは「愛」です。パウロはここで私たちがしっかりと身に着けるべきものは「真実の愛」であると教えます。

2) 12:9 b 善を行なう愛

9節の後半に「悪を憎み、善に親しみなさい。」とあります。「悪を憎み」とは「悪からの完全な別離、分離」を表わしています。悪から完全に離れるということです。そして、「善に親しみなさい。」と、これ

は「ぴったりとくっついて離れない」ということです。だから、私たちは善にぴったりとくっついて、どのようなときにも、たとえ困難があっても善から離れない、善を最後までやり通すということです。パウロはⅠテサロニケ5：21-22でこのように教えています。「しかし、すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。：22 悪はどんな悪でも避けなさい。」と。私たちは悪を憎んで善を行なう、そのような愛を身に着けるべきだと教えます。

3) 12：10 尊敬する心をもつ

10節の冒頭には「兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、」と書かれています。「兄弟愛」とはギリシャ語で「フィラデルフィア」ということばですが、このことばは元々肉親の愛情を表わすことばです。私たちはこの兄弟愛を私たちクリスチャン相互の愛としなければいけないとパウロは言います。ヘブル人への手紙の著者もそのことをこのように言っています。ヘブル13：1「兄弟愛をいつも持っていなさい。」と。また、ヨハネはⅠヨハネ4：20-21でこのように教えています。「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。：21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。」、ヨハネもパウロと同じことを私たちに教えているのです。

そして、10節の後半は「尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。」と教えています。これを直訳すると「尊敬において互いに先に立ちなさい。」という意味です。だから、先ず、私が先に相手を尊敬する。尊敬を受けるから尊敬するものではありません。パウロはピリピ2：3で「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」と記しています。私たちは尊敬されると自分も尊敬する思いを持つかもしれませんが、パウロが教えることは違います。先に相手を尊敬しなさい、そのような心をもちなさいと私たちに勧めるのです。私たちは兄弟愛をもってお互いに尊敬し合うべきです。パウロはこのことをクリスチャンに勧めています。

4) 12：11 喜んで主に仕える

11節「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。」、喜んで主に仕えるということ。私たちは喜んで主に仕えなければいけません。「勤勉で怠らず、」とは「熱心をもって怠ることなく」という意味です。どちらかと言うと、私たち人間の熱心は冷めやすいです。でも、パウロは「熱心をもって怠ることなく」、そして、「霊に燃え、」、内なる御霊の力に燃やされて「主に仕えなさい。」、主に服従しなさいということです。救われた私たちはよく知っています。信仰の心は従う心を生むことを。従う心を生まない信仰はありません。もし、「私には従う心がない」という方がおられるなら、私はその方に勧めます。自分の心を調べてください。信仰には従う心を生む力があるのです。

ペテロはⅠペテロ1：14の初めに「従順な子どもとなり、」と言っています。これはだれに対してですか？主人である主に対して私たちは従順な子どもでなければならぬということです。主に仕える、主に服従する、パウロがローマ人への手紙の中でそのことをはっきりと教えている箇所があります。ローマ6：16-18で「奴隷」ということばを使って、私たちがどのような立場の者であるのかをはっきりと教えています。「：16 あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。：17 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、：18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」と。私たちは主に仕える奴隷です。以前は、罪の奴隷でしたが、私たちは救われて義の奴隷、神の奴隷、イエス・キリストの奴隷となった者です。だから、私たちは喜んで主に仕えなければいけないとパウロは教えるのです。

5) 12：12 祈る者

どんなときも「祈る者」であるということ。クリスチャンはどのようなときでも祈る者でなければならぬということです。「望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。」。ローマ書5章

をご覧ください。5：2-5「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。：3 そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、：4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。：5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」「望みを抱いて喜び、」、私たちは神の栄光に与るという希望を抱いて喜びに溢れている者です。そして、「患難に耐え、」、私たちの身に起こる様々な苦難や迫害にも立ち向かっていく、そのような者です。パウロは今見たローマ書5章でもそのことを教えています。

そして、「絶えず祈り」なさいと続きます。祈り続けなさいということです。パウロはコロサイ4：2でもこのように教えています。「目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。」と。「たゆみなく」ということばの中には「休む」という意味はありません。休むことなく「たゆみなく祈りなさい」と教えています。また、皆さんよくご存じの1テサロニケ5：17でも「絶えず祈りなさい。」と教えています。私たちは愛が希望と忍耐を生み出すということを知っています。そして、祈りはその希望や忍耐をさらに大きなものにします。だから、私たちはどんなときにも、立っていても座っていても、食事をしていても、何をしているときでも、この「祈る」ということをいつも心に掛けなければいけないのです。パウロは「どんなときにも祈る者でありなさい」と私たちに勧めるのです。これが5番目のことです。

6) 12：13 助け合う心をもつ

13節「聖徒の入用に協力し、」、「入用」とは「必要なこと」です。それに協力する、「協力する」ということばは、元々のギリシャ語は霊的な交わりを意味することばです。しかし、ここでは「物質的な援助」を表わす意味で使われています。私たちは実際の信仰生活の中でこのことを体験することがあります。困っている兄弟姉妹があったときに、私たちは実際にその方々を助けています。また、助ける方法を考えているはずです。ヤコブはそのことを私たちにはっきりと教えています。ヤコブ2：15-16「もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、：16 あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。」と教えています。パウロも同じように、私たちは互いに助け合う心をもつ必要があると教えています。

そして、13節の後半はこのように書かれています。「旅人をもてなさない。」と。パウロが生きていた時代、当時の旅は大変な危険と困難がありました。今のように乗り物も宿泊施設もありません。だから、旅をすることはいのちの危険があったのです。パウロはそのような旅人をもてなすことはクリスチャンの愛の現われであると教えるのです。実際、私たちは「旅人をもてなす」ことをしています。私たちの教会ではJOYJOYの働きのために、約2カ月間、アメリカから多くの宣教師が来ます。私たちの教会の兄弟姉妹はそのために旅人をもてなしています。宣教師を自分のところに泊めたり、また、食事のお世話をしたりします。パウロがここで言っている「旅人をもてなす」ことを私たちも実際に行なっているのです。パウロは私たちに互いに助け合う心をもちなさいとこのように勧めるのです。

7) 12：14 迫害する者を愛する

14節には「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません。」とあります。私たちに危害を加える者を愛しなさいということです。皆さん、これは難しいことです。私にはなかなかできません。なぜなら、私に危害を加えるのです、私を迫害するのです。どうですか皆さん、そのような者を本当に心から愛することができますか？私たちクリスチャンにとっても非常に難しいことです。しかし、パウロは言います。そのような人たちを愛しなさい、祝福しなさいと。パウロはそれができると私たちに教えています。私たちは冒頭で、私たちの土台は愛であるということを見ました。この愛をもって、私たちが私たちに危害を加える者、また、迫害する者に愛をもって接するなら、相手の心は私たちに敵対するでしょうか？いいえ！恐らく、その冷たい心の氷も私たちの愛の行為が溶かす

はずです。パウロはそのことを私たちに勧めるのです。

マタイの福音書5：44-45にはこのように書かれています。「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。：45 それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。」、まさに、ここに書かれていることと同じことをパウロは私たちに勧めるのです。私たちは私たちが迫害する者を愛するべきです。また、みことばはそのように勧めています。

8) 12：15 一心同体となる

これは15節「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」と書かれています。ここでパウロは私たちに「霊的な交わり」を勧めています。前の13節では、物質的な必要を満たして上げなさいと教えたパウロは、この15節では私たちは「一心同体となる」ことを教えています。

9) 12：16 自分を低くする

私たちクリスチャンは自分を低くしなければいけません。16節「互いの一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思っははいけません。」、私たちには様々な垣根があります。意識しようとしまいとこの心の中には垣根があるのです。それは民族であったり、社会的地位であったり、あるいは、性別であったりと、私たちは知らないうちに垣根を作っています。その垣根を取り除いて一つ心になりなさいとパウロは言うのです。パウロはこの後の15：5でも「どうか、忍耐と励まし神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてください。」と書いています。また、ピリピ2：2でもこのように教えています。「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」と。

そして、16節を見ると「高ぶった思い」、「自分こそ知者だなどと思っは…」とありますが、私たちはすぐにこのような思いをもつ者です。容易にこのように考えるのです。私たちはどちらかと言うと、他の人よりも自分を高いところに置きたいという思いを強くもつ者です。でも、パウロは自分を低くしなさい、クリスチャンはそのようにあるべきだと言います。皆さんもよくご存じのように、イエスはご自分を低くされました。弟子たちの足を洗われたことを通して、私たちに見本を示されたのです。先生が弟子の足を洗うなどということは、自分を低くしなければできないことです。イエスは「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。」(ヨハネ13：15)と言われ、わたしの模範に見習いなさいと弟子たちに教えるのです。

また、この教えは私たちクリスチャンに対する教えでもあります。皆さんよくご存じのように、ピリピ2：6-7にはイエスがこの地上に来られたことが書かれています。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、：7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、」と、イエスは神であられるのに、そのことを捨てられて私たちの中に住まわれたのです。これ以上の低い思いはどこにあるでしょうか？ 私たちはみことばから自分を低くすることをひとり一人が考えなければいけないと思います。私の好きなことばがあります。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」、だれが言ったのか、ことわざなのか分かりません。よく子どもたちにも言いますが、このことばの通りだと思えます。稲穂は成長してその穂先に多くの実を付けるほどに垂れます。私たちもそのような者であるべきだとパウロはここで教えるのです。

10) 12：17 善に励む

このことに関しては9節の後半でも少し学びました。善を行なう愛を身に着けるということ学んだのですが、17節でパウロは「だれに対してでも、」と書いています。「だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、」と、クリスチャンであろうとなかろうと、私に良いことをする人であろうとなかろうと、すべての人に対して善を行なう、善に励みなさいとパウロは言うのです。そして、後半に「すべての人が良いと思うことを図りなさい。」とあります。それはすべての人の前で善を配慮しなさい、いつも心に善を覚

えなさいということです。私たちクリスチャンは悪を行わず善を行わなければいけません。私たちは悪に対して悪をもって報いることは簡単にできます。しかし、パウロは言います。「悪に悪を報いることをせず、善に励みなさいと。

11) 12:18 人との平和を求める

18節「あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。」私たちは私たちの相手がどのような態度であろうと、また、その結果がどうであろうと、私たちは自分から率先して相手との平和を保つ努力をし続けなければなりません。パウロはこの後の14:19でこのように言っています。「そういうわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこととを追い求めましょう。」と。

3. 結論

さて、私たちは今日、ローマ12:9-18から、私たち「キリスト者のあるべき姿」をパウロの勧めによって見て来ました。この11項目を皆さんはどれもできると思えますか？「私はできる、また、やっている！」と、恐らく、だれもそのようには思わないでしょう。「私にはできない」と思う方がほとんどでしょう。しかし、パウロはここで私たちにできないことを勧めているわけではありません。私たちはこのことを私たちの信仰生活の中で為すことができます。それは自分の力に頼らず、神の力によって、神の助けによって、聖霊の導きによって、私たちはこのパウロが教える様々なことを為すことができるのです。Iコリント13:13のみことばはこのように教えています。「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」と。私たちの信仰生活は「愛」を土台にと言いました。私たちは「愛の人」を目指さなければいけません。愛が私たち信仰者の行為の土台にならなければいけないのです。

さて皆さん、この年も36時間を切りました。もう一度、この年が一人ひとりにとってどのような信仰生活を歩んだ年であったのか、心の中に尋ねてみるそのときが必要だと思えます。私たちは今日、パウロから私たちのあるべき姿、私たちが追い求める姿を11個見ました。この11個を通して、一人ひとり、この一年、主を愛し隣人を愛して過ごすことができたでしょうか？もしかすると、「できなかった」と言われる方がこの中におられるかも知れません。でも、心配はないのです。私たちは2013年という新しい年を36時間後に迎えます。一番大切なことは、私たちがこの2012年を心から反省して、主の前に為した多くの罪を悔いて、2013年を心新たに、主への忠実と信頼と期待をもって迎えることではないでしょうか？私たちはそのようにクリスチャンとして2013年、主を喜び、主に感謝して新しい一年を過ごしたいと願うべきではないでしょうか？